# 選評

## 素晴らしい作品群

町田　康

日々の暮らしのなかでふと虚しさを覚え、生そのものに疑いを持つ、なんて瞬間は誰にでもある。謂わばそれは日常に生じた時間の亀裂のようなもので、時に人はその裂け目にはまり込んで、日常に帰って来られなくなる。宮本彩子氏の「クレソン」は、娘を育て終え、薄まったような時間を過ごす主人公の佐和が、その裂け目にはまり込み、幾つもの過去が交錯するその裂け目に見た景色を描いた小説である。人の命を水路に自生する根の浅い植物に擬え、同時に自らが水路の如き一本の管である事、どこからどこへ繋がるか判らぬその水路の一部であり、水路をたゆたう藻の如きものであることの寄る辺なさ、が巧みに描かれて優れた作品であった。結末の、「その子に大丈夫と伝えるためだけに、」という箇所が素晴らしかった。少しずつ明らかにされる事実も効果的で、文章も確かであった。

小林安慈氏の「流刑地にて」は、人生がうまくいかない「俺」と今は老いて人格的な問題を抱える「祖父」と祖父を憎んで許せない「父」が、根底の問題をそのままに、夫々の内部に、赦し、を得る、という不思議な安らぎを感じる作品であった。結末の一文が素晴らしかった。

赤信号で停まっている自動車を見ても人はなんとも思わず通り過ぎる。しかし事故を起こして大破している車を見ると、思わず足を淀めてしまう。人は壊れたものを見たい。春名美咲氏の「二人、溺れてる」は、健康志向に狂った母親と無力でそれに従う以外に生きる術を持たない中学生の娘の密着的な関係を描いて息がつまるような作品であった。精確に描かれる身体の動きと心の働きがよく結びついて、作者が描こうとしたところが無駄なく描かれて成功していた。

## 結末の光

堀江敏幸

宮本彩子さんの「クレソン」は、一度も噛んでいない香草の苦みと辛みが、乾いた口中に残るような感覚をもたらす。母であり妻である語り手のいまを描くにあたり、すでに家を出ている娘ではなく、かつて自分とも性愛の匂いのする秘密を共有していたその友人を比較の軸に持ってきたことで、行間に微妙な熱が生まれた。成熟と未成熟のあいだでゆれる虚ろな現在と過去が、クレソンの生える水路の流れに運ばれず、少し先の未来に向けてなんとか持ちこたえようとする結末には、作者としても手応えがあったのではないか。

小林安慈さんの「流刑地にて」は、父子三代の関係の濃淡を、巧みな構成でまとめた一作。認知症とおぼしき祖父と、東京での仕事を切りあげた「僕」の平穏な田舎暮らしに、祖父への憎悪を抱えた父親の半生が染み込む。息子としての父が、深い父恋いから解放される結末に差し込む希望の光を受け入れたい。

春名美咲さんの「二人、溺れてる」も母と娘の物語だ。生理の遅い娘を案じてやや常軌を逸した言動を繰り返す母親と、冷静にそのさまを見つめながら同化していく娘の組み合わせには、かなり粘ついた感触があるのに、寄り道をしないまっすぐな語りが、それをさらさらした明るい砂のようなものに変えていく。不思議な魅力がある。

## 身体の量感

青山七恵

「クレソン」は、油断ならない小説だった。娘のかつての友人と再会した女性の内面が、一見穏やかに滔々と語られていくが、そこにはきっちり取捨選択された言葉が並んでいて、不穏な淀みも見え隠れしている。展開も巧みで、終盤に置かれた「管」になる夢は強烈だし、何より最後の場面がすばらしい。子育て時代から眺めていた水路のクレソンが、老いた母をつかのま、母になる前の一幼女に変える。ところがひと一人に生きられた時間はそう都合よく流されるものではない。渾身の力を振り絞って水から上がる彼女の身体の量感に圧倒された。

「流刑地にて」。人生の停滞期にある「僕」と、野良仕事に精を出す祖父との会話の応酬がチャーミングだった。戦争経験者の祖父の苦しみはすべて語られず、父が味わった苦しみも癒えず、しかし両者の苦しみの記憶はぬるりとその孫、息子である「僕」に受け継がれていく。そのぼんやりとした継承の背後で、確かに触れて掴むことのできる土や木や芋の、世界の一片としての頼もしさが光っていた。

「二人、溺れてる」では、母の信じる「正しさ」に中学生の娘が懸命に適応しようともがく姿が丹念に描かれていた。プールの水のなかでのみ解放される彼女の心身の描写、視界の明るさが伸びやかで気持ちがいい。つかのまの自由を味わう場でもあり、かつ身体に生理があるかないかで微妙にアクセス権が異なるプールという場も、小説の舞台としてうまく活かされていたように思う。